KOMAZAWA × TOKYONOGYO

駒澤大学0－1東京農業大学

空中戦を制し、攻撃の起点となった巻。チャンスは作るも、ゴールを奪うことは出来なかった。自身もシュートは1本と不完全燃焼に終わった（撮影・川崎篤彦）

チャンスは作るも得点は奪えず 改めて知る1点の重み

更なる前進のために

「立ち上がりを大事にしていこう」。試合前に駒大が確認したことである。

試合開始わずか1分のことだった。中途半端なクリアボールを自陣で奪われサイドからの早い展開から、前節筑波大を破り勢いに乗る東農大に先制を許してしまう。念頭に入れていた時間帯だっただけに、信じられない選手もいたのではないか。この失点により駒大は縦への早い攻撃をより意識していくが、失点していなければ別のチャンスがあったのではないか」と**秋田監督**が語るようにこの日の駒大の攻撃は前線へボールは運べたが、そこからの選択肢がいつもより少なかった。

駒大の攻撃が行き詰まった原因として、相手の戦い方があった。前期では駒大の攻撃力を警戒し受身の姿勢で臨み完敗を喫した東農大は駒大の左サイドからの攻撃を多用。これまでサイドから幾度となくチャンスをつくってきた**島田**は常に備えまわることが多くなり、駒大のサイド攻撃は減少してしまう。「FWを使ってもいいけど、その後が抜けてなかった。攻撃にアイディアがなかったので相手はやりやすかったと思う」と**鈴木亮**が振り返るように自然と攻撃は中央へ偏り、相手DFの対応も容易となった。また、この日の東農大はこぼれ球への反応も早く、節の東農大はこぼれ球への反応も早く、節に続き**巻**のポストプレーから**赤嶺**がゴールを狙うという形が何度もあったが、DFは素早く体を寄せてシュートコースを狭めていた。相手が退場者を出した後半、圧倒的に攻め続けたもののゴールは奪えなかった。

「相手を褒める部分もあったが」と**牧野**が言うように、簡単な試合は一つもない。それは彼らが一番よくわかっているはずだ。自分たちはプロではないので（首位だからこそ）大物にならず学生らしい心構えでやろう。試合後**秋田監督**が選手に言った言葉である。警告累積で次節は4人が出場停止という厳しいチーム状況がリーグ優勝へ向けチームが一つになって勝利を目指すことができれば、この敗戦も価値のあるものになるのではないか。

（**斉藤 卓也**）